

### 第3章

---

## 女性からみたカイロの生殖の一風景

——家族をめぐる二つの期待の狭間で——

鳥山 純子

#### はじめに

2016年夏、カイロ郊外にある知人の携帯電話ショップで、エジプト人40代男性の産婦人科医Wとエジプトにおける生殖補助技術<sup>(1)</sup>の利用について聞きとりおよび意見交換を行った。時刻は夜の10時をまわり、近所は、夏の夜を友人たちと過ごす男性たちでにぎわっていた。W医師も、その地域の友人と夜を過ごすついでに、聞きとりに応じてくれていた。W医師を紹介してくれた私の友人である同じくエジプト人40代男性のMも聞きとりに同席し、無言でやりとりを聞いていた。Mは、40代後半の新興中産階級の男性で、大学を出た後、自らの才覚で、ツアーガイド、貸し不動産と事業を拡げ、ある程度の成功を収めていた。彼はW医師と同様英語能力に長け、私たちが英語で交わす会話を十分に理解していた様子だった。Mは、笑うべきときには私たちといっしょに笑いはしたが、時折冗談を言う以外には会話に参加してこなかった。ところが、会合が45分を過ぎようとした頃、なかなか終わらなさそうなことにしびれをきらしたのか、Mは突然立ち上がり次のように怒鳴り出した。

「エジプトの妊娠について話を聞いているのか。だったら俺が話してやるよ。俺はプロだからな。子ども五人、流産5回だぜ。今も妻は妊娠中だ。

俺以上にこの話について語る資格があるやつがいるかい。プロなんだよ」。

本章の目的は、このMと彼の妻ファイザ（仮名）の見解に表れる「子どもをもつこと」の意味づけを明らかにし、その作業を通じて、現代カイロとその近郊で不妊や生殖補助技術がおかれている社会的状況を描きだすことである。そこで続く節では、まずMとファイザについて説明を加え、エジプトで「子どもをもつこと」にかかわる議論を概観した後に、女性にとって「子どもをもつこと」が何を意味するのかを、彼ら・彼女らの日常生活の地平で考察していきたい。

## I Mとその妻ファイザ

### 「不幸な男」と「病気の女」

突然大声で怒鳴り出したMの口調はおもしろおかしくはあったが、そこには私たちのやりとりにはたいする明確な不満が込められていた。彼にはW医師と筆者との会話のが的外れなもののように聞こえたのだろう。筆者らに代わって、エジプトの妊娠にまつわる明確な回答を示すというのである。そして、六人目の子どもが生まれようとする自分の状況を説明するかのようになり、こう続けた。

「どうしたらいいんだよ。うちには頭のおかしい女（妻）がいるんだよ。マグヌーナ（頭がおかしいの意のアラビア語エジプト口語）。あいつはやっつけられないんだよ。赤ん坊が欲しいんだ。ひとり育ったらもうひとり。ひとり育ったらもうひとり。病気なんだよ。わかるかい。病気だよ。赤ん坊がないと生きていられない病気。どうやったってできちゃうんだよ。俺に何ができるっていうんだい。あの女とその母親、それに姉妹だよ。あいつらの競争なんだよ。俺の妻は病気なんだ」。

こうしたMの言葉には、私たちが小バカにするような様子は感じられず、妻につきつぎ子どもが生まれる状況に、心底困惑していることが伝わってきた。また彼が、私とW医師が交わすエジプトにおける不妊と生殖補助医

療の問題を、時間をかけて話す価値がないと考えていたことは明らかだった。

彼は最後に自分を憐れむかのようにこう締めくくった。

「不幸な男なんだよ、俺は。あんな女を嫁にもらって。結局、そのつけはだれにまわってくるんだい。俺だよ。全部俺。子どもは勝手に育たない。金がかかる。誰がそれを払う。俺だよ。俺ばかりが苦しめられるんだ。全部俺だよ。生活が苦しい。ふざけるな。俺の状態をみてからそんな言葉は言ってくれよ」。

Mはこの言葉を言い終えると、自分は店の外で待っているからと身振りで告げて出て行った。この発言でのMの態度は、自分のプライバシーを思いがけずさらけ出してしまい、照れ隠しに威勢のいい発言をしているようにもみえた。また、自分のコントロールの及ばぬところで子だくさんになった今の状況を弁解しているようでもあった。

Mの突然の告白とその勢いに、医師と私はあっけにとられた。そして数秒の沈黙の後、W 医師は、「典型的なエジプト人男性だね。そして彼の妻は妊娠の女神ってわけだ」とコメントをした。

### Mの苦しみ

Mは私の旧知の友人だった。彼と最初に知り合った17年前、Mにはまだ生まれたばかりの長男しかいなかった。その後、Mには新たに四人の子どもが生まれ、ファイザは第六子の出産を控えていた。

どうやら、Mの不満の源は、ファイザの妊娠・出産を自分がまったくコントロールできていないところにあるようだった。Mとファイザは、結婚当初から、子どもは三人までと夫婦で決めていた。それにもかかわらず、第三子出産以降もファイザは何度も妊娠・出産をくりかえしていた。

Mはそれを、ファイザが意図的に行っていると考えていた。なぜなら、Mが妊娠を疑い問いただしても、ファイザは大抵生理不順や体調不良といった説明をくりかえし、妊娠がわかる頃には、いつも人工妊娠中絶が難しい時期に入っていたからである。Mとファイザは、妊娠がわかるたびに、

ときには暴力の応酬を含む大喧嘩をくりかえし、ファイザは5回の「流産」<sup>(2)</sup>も経験していた。

## ファイザとM

傍らからみるかぎり、ファイザとMとの夫婦仲はいたって良好だった。ファイザとMがときに激しい喧嘩をすることがあるのは周知の事実だったが、ファイザがMについて筆者に語るときにはいつも、とても誇らしげな表情をみせた。彼女はMのことをハンサムで優秀な男性と説明し、もし人生をやり直してもMと結婚したいかとの質問には、「もちろんしたい」と即答した。

彼らはカイロ近郊の同じ村の出身で、遠い親戚の仲介によって1997年に結婚した。聞きとりを行った2016年夏までに17歳を筆頭に三男二女に恵まれ、その秋に、六人目の子どもが生まれる予定だった。二人とも、一族のなかで学校教育の恩恵を受けた第一世代だった<sup>(3)</sup>。ファイザは高校まで進学し、卒業後は就労経験をもたずにすぐに婚約、翌年19歳で結婚し、以来専業主婦を続けている。彼女は家事の達人で、とりわけ掃除が上手かった。一方、Mはカイロ大学に進学し、大学卒業後、土産物屋を経営する経験を積んだ後にツアーガイド試験に合格、スペイン語のツアーガイドになった。ファイザと結婚したのは、彼が26歳のときであった。調査を終えた2016年8月の段階では、Mはツアーガイドと同時に、茶房や文具店といった店舗経営と、リゾート地のマンションを中心とした貸し不動産業を営んでいた。

結婚当初から、彼らはMの実家の真上に築いた3LDKのマンションに暮らしていた。そのマンションは、六人目の子どもを迎えようという家族には少し手狭にみえ始めていたが、ファイザの手によって、いつ訪ねても塵ひとつなく、きちんとした状態に整えられていた。ファイザは周囲からも、家事が得意な「できた嫁」として知られていた。

またMも、決して子どもをないがしろにしていたわけではない。騒々しい生活や経済的心配に縛られながらも、子どもをかわいがり、休日になる

とMが家族全員を一台の車に詰め込みスポーツクラブ<sup>(4)</sup>へ出かけるのもよくみかけていた。Mは、はた目には自分の子どもたちのことを誇りに思う申し分のない理想的な父親だった。また妻のことを大事にしていることも十分にみてとれた。

## II 子どもを欲しがるエジプト社会

### 子どもを欲しがる傾向

エジプトは、中東諸国のなかでも結婚し子どもをもつことを重視する社会といわれてきた(PCWANA 2011)。たとえば女性の生涯未婚率3%は、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、イエメンと並び極端に低い数値であり、ほとんどの女性に結婚経験があることを示している。また30歳以下の既婚者を対象に行った2014年の調査によれば、エジプトの平均初婚年齢は、女性22.1歳、男性27.5歳であり、多くの人々が若いうちに結婚していることがわかる(詳しくは、巻末付録表付-1参照)<sup>(5)</sup>。

また、結婚したカップルには子どもをもつことが期待され、結婚後数カ月のうちに第一子を授かることが理想とされている。2010年に行われた調査では、20代の既婚女性の94.1%に出産経験があることが明らかになっており(PCWANA 2011,44)、子どもを望む社会的期待が、強い影響力をもつ規範として機能していることがわかる。多くの女性が若くして出産を経験する要因としてひとつ指摘できるのが、エジプトでは就学や就業が出産を直接妨げると思われていないことである。たとえば、女性が若くして結婚する場合には、結婚の際に交わす契約において就学や就業を保証する文言が記載されることがある。しかし、そのあいだ、子どもをもうけないとり決めを交わすわけではない。ある調査によると、15歳から29歳の既婚女性で出産経験をもつ女性87.9%のうち、出産と同時期に就業していた女性の割合は87.3%にのぼり、数値的にもこの傾向が裏づけられている(PCWANA 2011,44)。

これらの情報を統合してみえてくるのは、現代エジプトでは、ある程度の年齢以上の女性には無条件に、結婚をし、子どもをもっていることが期待される状況である。

ただし子どもの数についていえば、2014年の合計特殊出生率は3.3（1984年の値は5.4、ちなみに2014年の日本の値は1.42）と、過去30年で大幅な下降傾向が示されている（World Bank 2017）。またエジプトの15歳から29歳の男女が考える理想の子どもの数は、2.8と、合計特殊出生率を下回っている（PCWANA 2011, 128）。

### 公的関心事としての子ども

家族というユニットのなかで子どもが重視される傾向は、エジプトに限られたことではない。ただし、エジプトの場合、しばしば、子どもをもつことが、日常生活の至るところで個人や夫婦の問題だけでなく、親族やコミュニティ、ひいては社会の問題であるかのように扱われるところに特徴がある。その際たるもののひとつが、第一子誕生を契機とする呼称の変化である。

エジプトでは、夫婦は第一子が誕生すると、「アボ<sup>(6)</sup>・〇〇」（〇〇の父）、「オンモ・〇〇」（〇〇の母）と呼ばれるようになる。〇〇には、基本的に第一子の名前が入るが、最初に生まれた子どもが女兒であれば、男児が生まれた後に、その男児の名前に入れ替わることもある。とりわけ、女性の名前が直接呼ばれることがタブー視される保守的な地域では、出産後、女性は、永続的に「〇〇の母」、あるいは母をとって「〇〇」と子どもの名前前で呼ばれるべきだと広く考えられている。その場合、その女性のファーストネームを呼ぶことが許されるのは、夫や自分の両親などその女性の扶養義務が課されているものだけだといわれることすらある。実際、喧嘩のさなかに相手の母親の名前を口にすることは非常に強い侮辱を示す行為だとされている。

子どもの名前や、「〇〇の父」「〇〇の母」という呼称は、家族や居住地域といった子育てと深くかかわりのある空間だけでなく、職場や銀行、病

院といった公共性の高い空間においてもより尊敬を込めた呼び方として用いられている。呼称という、ある人物にかんする最初期の情報に子どもの有無が反映されることから、社会における子どもをもつことに付与される重要性と、それが個人の私的な問題であると同時に、親族、コミュニティをはじめとする、社会全体の関心事とされていることを垣間みることができるだろう。

このように、子どもの誕生に寄せられる期待は、表象の問題としてだけでなく、社会の隅々にまで浸透する社会的期待として日々の生活の至るところに存在する。筆者自身、エジプト人男性と結婚した直後にこれを思い知らされたことがある。結婚して数カ月妊娠せずにいた筆者は、ある日、姑と、近隣に暮らす姑の友人だという面識のない女性たちに、「妊娠をしているかどうか確認する」という理由で、あやうく強制的に下半身を触診されそうになった。普段から、互いに全身の脱毛<sup>(7)</sup>を手伝い、姑に裸をみられることには慣れていたとはいえ、このときはさすがに驚き、筆者は激しく抵抗した。すると姑は、家族としての心配をないがしろにしたと言って不満を露わにした。女性が子どもを授かることは、それほど家族やコミュニティにとって関心の高い出来事として扱われているのである。

### 中東ジェンダー学にみる女性にとって子をなすことの意義

以上のような傾向を反映して、中東ジェンダー学では、女性の妊娠・出産にたいして並々ならぬ関心が寄せられてきた。一般に、人々が子どもを望む理由とされるのは、①社会的保障（労働力、あるいは高齢者介護の担い手の生産を目的とする）、②社会的権力（親になることで得ることのできる力を目的とする）、③社会的継承（名前の継承、あるいは社会的集団としての顕在性を保持するための人口増加を目的とする）である（Inhorn 2003, 8）。中東ジェンダー学では、長年、女性がなぜ主体的に生殖にコミットしていくのかを説明することが試みられてきた。そこで発展したのが「家父長制」にかんする議論である。

ここでいう「家父長制」とは、家族のなかの年長者や男性を、家族の幼

年者や女性が立て、年長者や男性が幼年者や女性を扶養し、庇護する関係をいう。人類学者のカンディヨティは、世界的にみられる家父長制的傾向を分析し、もっとも性別役割分業が厳密に実践される家父長制のあり方を「古典的家父長制」と名付け、それがみられる地域として中東をはじめとするサブサハラ地域と東アジア地域をあげている。カンディヨティによれば、そうした地域で実践される「家父長制」の核となるのは、女性が、家族のなかの年長者（ここに姑も含まれる）と男性に従うことであり、それによって女性や若年者は、家族のなかで物質的・精神的な保護を得ることができる。すなわち、年をとること、また稼ぎ手となる息子を多く育てることで、独立した収入のない女性であっても、物質的資源へのアクセスや社会的尊敬を手に入れることができるという（Kandiyoti 1988）。

また、レバノンの家族関係を研究した人類学者のジョセフは、中東における家族の基礎がしばしば血統主義的つながりにあることに着目し、女性は結婚しても、姻族だけでなく親族の物質的再分配のネットワークにも位置づけられ続けることを明らかにした。すなわち女性は、結婚後も、夫だけでなく、実父や兄弟、父方オジ、成人した息子などに物質的、経済的な支援を求める権利が永続的に認められている。しかしそれは同時に、その女性の夫の資源もまた、夫の実母、姉妹、姪といった女性が受けるべき分配の対象となることも意味している。こうした状況において女性が、夫、あるいは姻族の物質的再分配に与ろうとすれば、子どもをもつこと（子どもは父系に位置づけられるため、女性からみたとときに夫の親族に含まれる）がそのための安定した手段になるという（Joseph 1994）。別の言い方をすれば、女性にとって夫の子どもを産むことは、父系家族における嫁としての地位の確立や、結婚という絆の強化をもたらすものだと考えられてきた（Inhorn 2003, 9）。

こうした議論では、女性たちが子どもを望む動機の中核を占めるものが、経済的資源分配や、婚姻関係強化といった機能的側面にあることが前提とされる一方、女性たち自身が子どもをもちたいという欲求をどのように理由づけし、どのようにそれを語るのか、という点については関心が向けられてこなかった。本章で中心となるのは、そうした、いままで汲み上げら

れてこなかった、個々の女性の声やその語り方であり、そこに読みとることのできる論理や、感情である。続く節からは、Mの妻、ファイザを中心に、これらの点について明らかにしていきたい。

### Ⅲ 女性にとっての「子どもをもつ」こと

#### 夫への愛情表現／夫からの愛情表現としての子ども

ファイザが筆者に語ったところによれば、エジプト人女性が多くの子どもを欲しがると理由は、夫への愛のためであった。すでに五人の子どもをもち、六人目を出産しようとしていた自らの状況も、彼女が夫を愛し、夫が彼女を愛していることによって説明できるという。彼女はそれを、妻が夫を想って髪の毛や爪をヘンナで染めることや、全身の脱毛を欠かさないと同じことなのだと言明した。つまり、それらはすべて、「夫をよろこばせる」ために課される妻の義務である。

こうした文脈で「夫をよろこばせる」こととは、性交渉において男性に満足をもたらすことを意味している。すなわち、子どもがたくさんいる彼女の状況は、夫への愛情表現として夫に性的満足をもたらす彼女の努力の末のものだと理解されていた。

ファイザは、夫との性交渉に非常に積極的だった。ファイザが言うには、夫と積極的に性交渉をもとめしない女性は、妻としての自覚に欠ける自分勝手な女性である。常日頃から脱毛を欠かさず、ベッドではセクシーランジェリーを着用し、あるいは部屋を清潔に保つことで夫から愛情を得るべく努力を続けるファイザにとって、それらを怠る女性は、男性に愛される資格のない女性であった。そして子どもとは、妻から夫への愛情表現の結果授かるものであり、夫から妻への愛情を示すシンボルでもあった。

## 社会の関心事としての子ども

ファイザのように、子どもが夫から妻への愛情を示すものとして理解されているならば、妻にとって子どもを産むことは二重に重要な意味をもつ。子どもは、夫婦の愛情の証であると同時に、愛情によって結ばれた夫婦という紐帯を可視化させる役割を果たす。この、子どもが結果であり要因でもあるという二重の意味づけは、カップルが、個人的な愛情の問題としてだけでなく、家族というユニットとして夫婦として社会的に存続できるかどうかを左右しうる重要な要素となり得るものである。そのため、夫婦の性交渉は、夫婦のプライベートな出来事であると同時に、家族の関心事でもある。結婚後、嫁いだ娘の性生活にファイザの母親が積極的に介入しようとした姿勢は、それを如実に物語っている。

ファイザの結婚後、彼女の母親は、ファイザの脱毛方法や、夫をベッドに誘う方法といった細々したことにまで口を出してきたという。母親にとって、新妻となった娘が無事に結婚生活を送れているのかどうかは深刻な問題である。結婚後に姑と上手くやれているのか、料理や掃除が上手くやれているのか、夫とは満足な性交渉がもてているのか。尽きない母親の心配のなかでも、夫との性交渉の頻度や様子については、とりわけ具体的な質問がなされたという。またファイザの母は、性交渉の頻度が下がった場合の対処法として、夫が精をつけるために食べさせるべき料理から、ムダ毛や肌の手入れの仕方、また夫の仕事の疲れをいやす方法やその際にかける言葉に至るまで、微に入り細に入ったアドバイスをしたらしい。さらに性交渉の頻度が高すぎる場合に備えては、性交渉による男性の就労意欲の減退や、頻度の高すぎる性交渉が妊娠への逆効果をもたらすことがあるといった、過度な頻度の性交渉のリスクにかんする知識提供があったという。

## 夫をベッドに誘う手管

その一例として、ファイザがもっとも具体的に語ったのは、夫をベッドに誘うための方法だった。

そのひとつ目は、エジプトで伝統的な脱毛方法といわれる、砂糖、レモン、水からなる自家製の脱毛ワックスを使った全身脱毛、さらに糸をよじって行う顔の脱毛である。体の脱毛では、頭髮以外のすべての毛を脱毛する。大規模な全身脱毛は40日に一度、妹と誘い合って互いの体を脱毛する。ファイザの脱毛の仕上がりがよいことは婚家でもよく知られ、夫の母、姉妹、夫の兄弟の嫁の脱毛を頼まれて行うこともあった。顔の脱毛は、体の脱毛以上にこまめに行い、これもやはり請われてほかの女性に行うことが頻繁にあった。

さらに、レース、リボン、サテンを多用したベビードールや透けるパンティーといったセクシーなランジェリーを数多く用意することも、夫を誘うための努力として語られた。こうしたセクシーランジェリーは、一般的に、花嫁が嫁入りの際に数多く用意することになっている。ファイザも嫁入りの際には大量のランジェリーを用意し、さらに、結婚から18年以上たった今でも、折りをみて新しいものを買足し、夫に飽きがこないように気をつけていた。

また、夫が性的な気分になるような、ロマンチックな空間づくりの重要性も語られた。ファイザは掃除が非常に上手く、家をいつでもきれいに整えていた。そのなかでも夫婦の寝室にはこだわりをもち、カイロで愛を囁くときの小道具とされる、泰迪ベアや、ハート形のクッション、ハートの刺繍の入ったベッドシート、真っ赤なサテンのベッドスプレッドなどでロマンチックな空間づくりが意識されていた。また毎週木曜日には幼い子どもを早く寝かせ、夫婦の時間がもてるよう準備を欠かさないことも重要であるという<sup>(8)</sup>。

あるいは、木曜日には昼食から気を配り、夫の好物や、精がつくといわれるラクダ肉、エビなどを調理するように、という気配りも、夫との性交

渉を意識して語られた。加えて、夫の身体的、精神的負担になることを避けるため、性交渉は週に3日以内にとどめているという。

こうした事柄は、ファイザの母親や周囲の年上の女性たちからアドバイスとして伝授され、ファイザもまた、嫁いでいく娘たちに伝えるべき事柄と考えられていた。

### 女性主導の性交渉

こうした、母親による結婚した娘の性生活への介入は、娘の結婚生活の安定を願う母親の気持ちとして説明することができる。しかし、むしろここで注目を促したいのは、性交渉の有無や頻度が、妻がコントロールすべきこととして語られていた点である。その背景には、性生活の成功のカギは、一般的に妻に握られていると考えられ、またその成功が妻となった女性の評価に直接的に反映されるというエジプト社会に広く流布する認識がある (Atiya 1982)。他方、男性は、一般的に言えば、つねに女性に性的関心を抱き、性交渉を求め、またそれが可能な存在とされている。抑えがたい男性の欲望は、女性に上手くコントロールしてもらうべきものなのである (Mernissi 1985)。エジプト農村部で家族計画について研究したアリも、家父長制的傾向が非常に強く、男性優位が広くみられるエジプト農村部であっても、避妊が女性の責任で行われていたことを明らかにしている (Ali 2002)。避妊が女性の責任とされる背景には、こうした、荒ぶる男と諫める女という男女観にもとづき、女性が性行為の主導権を握るべきとする認識がみえ隠れする<sup>(9)</sup>。

また、性生活の成功がそのまま妻の評価につながることから、既婚女性どうしの会話では、自分がいかに夫に求められる女であるかが頻繁に語られる (Atiya 1982)。他方、性生活が充実していない場合、女性がそれを語ることはほとんどないという。自分が夫に愛されていない、ひいては女性としての価値が低いという評判に直接つながりうるものは、よほどの理由がないかぎり隠される。それは、上述のように、女性間で交わされる夫婦の性的話題が、夫婦の仲の良さや結婚の安定を示すバロメーターとしてと

らえられ、その成功の程度によって女性の価値が語られることがあるからである。

#### IV 妊娠・出産のための努力

こうしたファイザの事例では、夫婦が当然のように子どもをもつことが期待される社会の価値観を背景に、結婚して妻になった女性が子どもを産むことが、他人からのさまざまな邪推や誹りを退け、夫婦関係に安定をもたらすものであることがみえてくる。また女性にとっては、優れた妻として、価値のある女性としての社会的評価を得るうえで、子どもを産むことが重要であることがみてとれる。すでに五人の子どもをもつファイザは、周囲の女性、とりわけ実家の姉妹や女性親族に成功者としてアドバイスを求められることも多いようだった。そんなとき、彼女が指南するといういくつかの事柄を、以下、(1)妊娠しにくくなる状態を避ける努力と、(2)妊娠しやすい状態を医学的に整える努力、に分けて整理したい。

##### 「ムシャハラ」の禁忌

ファイザはよく、なかなか妊娠できない女性をみては、それが「ムシャハラ」によるものだと語っていた。「ムシャハラ」とは、妊娠や母乳の出を妨げる、日本の感覚でいえば呪まじないによって生じる力のようなものである。「ムシャハラ」には、ほかの女性から受け取ってしまうものと、ほかの女性に与えてしまうものがあり、いずれも、女性どうしのあいだでしか生じない力である。

多くの家庭には、女性たちがこの特別な力の影響を受けないように、あるいは、ほかの女性に影響を及ぼすことを避けるためにやるべき慣習が伝わっている。ファイザもまた、自分が妊娠中、流産の後、出産の直後にはこうした「ムシャハラ」を意識した慣習を実践し、自分の妊娠出産がスムーズに進むよう、他人に「ムシャハラ」を与えないようにと気をつけて

いた。たとえばファイザは、5回目の流産直後から、ほかの女性に「ムシャハラ」を与えることを避けるために、木製の大きめの球体をつなげたネックレスを身に着けたという。ネックレスは母方のオバが用意し、流産時の月が新月になるまで欠かさず身に着け、その後はまた母親経由でオバに返却したらしい。

ある女性が「ムシャハラ」をもつとされるのは、ある程度の年齢を超えても子どもができない場合、またファイザのように流産を経験してしまったときである。しかも、それは女性本人の意思とは関係なく効果を発揮する力であるらしい。また「ムシャハラ」の影響を受けた女性には、その自覚症状はないことが多いという。そのため、なかなか子どもができない女性や母乳の出が悪い女性には、別の女性からの「ムシャハラ」の影響を疑う言葉がかけられる。

ただし特定の方法によって、「ムシャハラ」は無効にすることができるとも考えられている。その方法にはさまざまなものがあり、またそのうちのどれがもっとも効果的であるかについては意見が分かれるところである。たとえば「ムシャハラ」の被害者がその力から逃れるためには、「ムシャハラ」をとり除く力があるとされるネックレス（先述の、「ムシャハラ」の加害者が身に着けるネックレスとは別のもの<sup>(10)</sup>）を水に浸し、その水で7回沐浴するといったものから、ラクダの尿を脱脂綿に含ませ、それを7日間臍に入れるといったものまでさまざまだった。そこには個人単位のバリエーションがあったが、大まかに分けて、沐浴によって「ムシャハラ」を洗い流す方法と、臍に何かを入れて「ムシャハラ」の効力を相殺するものという二つの方法が確認できた。同様に、まだ起きていない「ムシャハラ」を避けるために行うものには、「ムシャハラ」を撥ね退ける力がある特定の装飾品を身に着ける、あるいは長く子どもをもたない女性や流産をした女性に近づかないという方法が知られていた。「ムシャハラ」の力を無効にするために用いられる特定の装飾品には、近親者内で受け継がれているものが多く、必要に応じて、親族の年配の女性が用意するのが一般的であるらしかった。

ただし、「ムシャハラ」の呪<sup>まじな</sup>いの性格上、現代カイロに暮らす人々には

その存在を知らない人も増えているという。筆者が聞いたかぎりでも、とりわけ男性たちは出身階層にかかわらず、「ムシャハラ」にたいして、否定的な態度をとることが多かった。また「ムシャハラ」とイスラームを結びつけて考えることには、男女を問わず否定的な姿勢が示された。結果として筆者は、現代カイロの多くの男性にとって「ムシャハラ」は、後進的な人々が行う慣習であり、それを信じ行う人間は無知であるとする見解が一般的だと印象を受けた。他方、既婚女性たちの場合、男性同様「ムシャハラ」にたいする否定的評価も聞かれたが、概して豊富な知識があった。たとえば、「ムシャハラ」を気にしないという女性たちであっても、「ムシャハラ」を重視する具体的な友人・知人の名前をあげることができた。さらに、「ムシャハラ」という言葉を用いはしなかったものの、近親者にすすめられて特別な水で沐浴したり、特定の装飾品を身に着けたことがあったという女性もいた。

また「ムシャハラ」という言葉で語られはしなかったが、ファイザの母親からは、子どもを授かるために行うお詣りについても話を聞いた。ファイザの村には、かつて女性たちが夜になると妊娠を祈願して7回くぐる橋があったといい、結婚後すぐに子どもを授かることのできない新妻は、周囲の人間にそこに行くよう勧められたらしい。しかしその橋は、農業運河の暗渠化にともない20年以上前に解体され、それ以降、そうした話は聞かなくなったという。

## 医療機関の利用

薬局や産婦人科クリニックを上手に利用し、最先端の「正しい」情報を収集することも、子どもを授かるための賢い妻の重要なテクニックとして語られた。

### (1) 薬局の利用

薬局は、エジプトでは地域の初期治療（プライマリーケア）を受けもつ医療機関となっている。都市部では各街区に一軒は薬局があり、人々は、

薬の購入から健康相談、注射、あるいは日常使いの衛生用品の購入などを目的に薬局を頻繁に訪れる。

ファイザがおもに利用する薬局は、家から15メートルと離れていなかった。しかしその薬局以外にも、実家近くの薬局や、大通りに近い比較的規模の大きい薬局などいくつかの薬局の名刺を大切に保管し、適宜用途に合わせて複数の薬局を利用していた。薬局の名刺には大抵、薬局の名前、薬剤師の名前、携帯電話番号の記載がある。薬剤師の電話は薬局の営業時間外でも通じることが多く、顧客は時間を気にせず、電話一本で、薬の配達依頼や、医療相談ができる。ファイザは、筆者との聞きとりの際、名刺を保管しているというナイトスタンドの引き出しから何枚かの名刺を取り出すと、それを筆者にみせながら、女性にとっていつでも相談できる薬局があることは、子どもを上手にもつためにも重要なことだと説明した。

ファイザの場合、結婚直後こそ産婦人科を受診し避妊相談を行っていたが、近頃は、ピルの購入や、性器の違和感や妹の不妊相談もまずは薬局に直接赴き行っていたらしい。このように、とりわけ、第三子出産直後に避妊方法をIUD（子宮内避妊用具、エジプトでは一般的に産後1カ月検診時に産婦人科医によって子宮内に装着される）からピル（エジプトでは医師の処方箋なくピルを購入することができる）に変えて以降、ファイザは、服用するピルの種類や適切な授乳期間に至るまで、性にかかわるあらゆる問題をまず薬局に相談するようになっていた。その理由について彼女は、薬局の薬剤師たちが性にかんする専門的知識に富んでいるから、と説明した。

## (2) 産婦人科クリニックの利用

ファイザにはまた、自分で集めたという産婦人科の名刺コレクションがあった。ファイザは近隣に暮らす多くの女性たち同様、第三子出産までは自宅近くの女性産婦人科医にかかっていた。しかし第三子出産後に使用したIUDの不具合によって大量出血を起こしたことをきっかけに、カイロの中心部に近い、有名な体外受精クリニックと連携のある大規模な産婦人科クリニックに通うようになっていた。クリニックや医師を変えた理由について、ファイザは、二つのクリニックの特徴について、以前利用してい

たクリニックが「馬小屋のようだった」のにたいし、現在のクリニックは利用料が高く、それに見合った顧客しか来ないモダンなクリニックだからだと説明した。

ファイザは過去に、なかなか子どもをもてなかった彼女の一番下の妹にその医師を紹介したこともあったという。一番下の妹は、結婚直後に子どもができにくい体質と診断され、何度か妊娠しても、早期の流産をくりかえしていた。結局この妹は、ファイザが紹介した医師の監督のもとに体外受精を行い、無事妊娠出産をすることができた。さらに彼女はその後、自然妊娠で第二子をもうけていた。

ファイザの妹のように、子どもができにくいことを理由に産婦人科クリニックを受診することは決してめずらしいことではない。カイロ市内と近郊農村地域の2カ所で産婦人科クリニックを経営するH医師によれば、生殖補助医療には、クリニックごとにさまざまな価格帯が設けられており、何らかの医学的支援を求めてクリニックに来院する人々は、収入に余裕のある層に限らないという。彼のクリニックが設定する体外受精一回分の料金は1万5000エジプトポンド（2015年のレートでおよそ25万円）で、その金額は決して安いものではない。しかしそれにもかかわらず、農村部に暮らす、財産をほとんどもたない男女もH医師のクリニックに大勢やってくるという。H医師は、彼らの資金源について詳しいことはわからないと言いながら、おそらく、親戚や周囲の人間から借金を重ねて来院するのではないかと話していた。

またファイザによれば、一般に、女性が不妊を理由に産婦人科クリニックに通院することは恥ずべきことではないという。彼女はそれを、妻として行うべき正しい行為のひとつとして考えていた。ただし、クリニックに通院するのであれば、適切な治療ができるクリニックや医師を知っている必要があるため、誰にでもできることではないらしい。

こうしたファイザの説明では、通院するクリニックや担当医師には序列があること、そして「よい」クリニックで「よい」医師にかかるためにはそれに応じた社会的地位が必要であるという持論が語られた。筆者はそこから、かつて筆者の別の友人が体験した出来事を思い出した。その古い友

人は、妊娠しにくい体質であることが判明した後、どこのクリニックに通うべきかで実家と婚家がもめ、あわや離婚という騒動にまきこまれた。それぞれの家族が、互いに自分たちが推す医師やクリニックがより優れていると言い張り、最後には、それぞれが薦める医師にかかることが禁じられるまでに話がこじれてしまった。それほど、どこのクリニックの、どの医師と知り合いなのか、またどのような基準でクリニックや医師を選択するのかという判断には、単なる医療サービスの利用という概念を超えた、家族の社会的ステータスや社会的ポジションをめぐる交渉という側面がある。

またファイザと同年代で同じようにカイロ近郊で育った大卒女性たちによれば、近年都市部では、結婚前の女性が産婦人科に通院することも一般的になりつつあるという。そうした女性たちの主たる通院目的は、結婚に備えて、自分の体に妊娠の障害がないかあらかじめ確認することにあるらしい。またそこでも、有名クリニックに通院したという事実が、隠されるものであるどころか、自らのステータスを示すためにも積極的に語られるべきものであるという。筆者の知人の30代前半の女性のなかにも、結婚前に有名産婦人科クリニックで検査をしたという女性が三人おり、そのなかのひとり、実際に「卵管洗浄」（受けた治療の説明から、おそらく卵管造影検査のことだと思われる）を受け「妊娠しやすい体」になったと話していた。特筆すべきは、産婦人科で検査を行ったという三人の女性たち全員が、そうした有名クリニックへの通院目的を、自分が「ナディーファ」（清潔）になるため、と説明したことである。「ナディーファ」とは、物事の不潔・清潔という文脈のみならず、広い文脈で、望ましい、清廉、という意味で使われるアラビア語カイロ方言であり、男性が理想の結婚相手を語る際にまず出てくる表現でもある。結婚前の有名産婦人科クリニックへの通院を、女性たちが「ナディーファ」と表現したことからは、彼女たちが有名産婦人科クリニックへの通院を、医学的問題解決のためだけではなく、自らを望ましい状態に整える手段として利用し始めている実態が垣間みえる。今後有名産婦人科クリニックへの通院は、脱毛などと同様、医学的問題のあるなしにかかわらず、ある種、結婚前から始めるべき女性のたしなみのひとつとして、また社会的ステータスの指標として、ますます広

く認知されるようになっていく可能性は高い。

## V 女性の問題としての性交渉、妊娠、出産

### 男性不在の語り

性交渉、妊娠、出産についてのファイザの語りでは、男性は働きかけの対象、すなわち客体として登場するが、ともに何かをする存在としては登場しない。そればかりか、彼女が性を語るなかでは、男性についての期待も不満も表出せず、語り全体に男性不在が通底している。代わりに彼女が語るのは、良き妻として、良き女性として、女性たちが一人ひとりで、あるいはほかの女性の手助けを得ながら行うべきとされる努力の数々である。そこで語られているのは、女性が、自らの主体的行為として、妻や女としての役割をより良く全うするための方法だった。ここで興味深いのは、性交渉、妊娠、出産が、いずれも夫婦単位ではなく女性が単独で行う努力として語られていたことである。本来女性ひとりでは子どもを授かることができないにもかかわらず、性交渉や妊娠が、女性の出来事として女性だけで完結するものであるかのように表現されたことは非常に示唆的である。

また、性交渉、妊娠、出産にかかわる話が、ファイザに限らず、筆者が調査を行った、カイロ郊外の（比較的保守的といわれる）A村の中産階級の女性たちによって、常日頃から活発になされていた点にも注目する必要があるだろう。性交渉、妊娠、出産は、筆者のこれまでの調査経験のなかでも女性たち自身がかかってもっとも強く興味を示したテーマであった。女性の就労や化粧といったこれまでの筆者の調査テーマには大した興味を示さなかった女性たちも、「妊娠と不妊と生殖技術」を対象とし、性交渉、妊娠、出産について話が聞きたいと説明した今回の聞きとりでは、みな積極的に自分の考えを語り始めた。若い女性であれば現在進行形で、初老の女性であれば、かつての自分の出来事としてそれぞれに悔いたり誇ったりする経験をもっていた。聞きとりの際には、みな自分の経験や、娘たちへのアドバ

イスなどから、自分自身の工夫や、特別な出来事を我先にと語りたがった。

その理由のひとつには、性交渉、妊娠、出産が、彼女たちの人生において少なからぬ意味をもつものとして、実際に子どもを産んだかどうかにかかわらず、既婚女性一人ひとりに生きられていたことにあるだろう。彼女たちの積極的な語りからは、それらが、彼女たちが女性として生きていくうえで大きな関心事のひとつであり、日々自分なりに研鑽を積んできたであろうことがみてとれた。

あるいは、女性たちによる性交渉、妊娠、出産についての語りだが、単なる個人的体験の開示であることを超えて、その場に同席していた筆者やほかのエジプト人女性にたいし、自分のテクニックを披露し、競い合う、自分自身の評価を交渉するアリーナであり続けていたからだとも考えることもできるだろう。彼女たちが自分のテクニックを明瞭に言語化し、明快に説明・描写していた様子から推察するに、性交渉、妊娠、出産は、普段から彼女たちが語るべきものとされていた可能性は高い。つまり女性たちにとっての性交渉、妊娠、出産とは、男性と行う生殖行為であると同時に、それについて語り合うことで女性どうしをつなぐ行為であり、さらには、女性間に序列を生み出す基準であったとも考えられるのである。

## 女性へのスティグマ

先述のようにファイザは、女性が子どもを授かるためにクリニックに通うことを恥ずかしいことではないと考えていた。また結婚前にクリニックに通ったという女性たちの体験も、ファイザと同じく、現代カイロで妊娠を目的とした医療機関の利用が一般的になりつつあることを裏づけるものといえるだろう。とはいえ、未婚の若い女性たちが「ナディーファ」になるためにクリニックに通うという発想は、裏を返せば、不妊が、結婚に先立ちとり除かれているべきリスクととらえられているという認識を示唆している。つまり、彼女たちが気楽にクリニックに通えるようになったことを根拠に、不妊に付与されるスティグマが軽くなったととらえるのは早計だろう。実際、2015年、聞きとりのために市内の体外受精クリニックを

まわるなかでも、不妊のスティグマを示唆する光景をみることがあった。

筆者の訪問を許可し、医師が聞きとりに応じてくれたカイロ市内の3カ所の体外受精クリニックは、いずれもカイロでは広く名の知れた民間クリニックだった。それぞれ個性はあるものの、ドアを入るとまず受付と、清潔感が保たれながらもモダンな雰囲気を出した最初の待合室があり、ステンレスやガラスを多用したインテリア、リノリウムの床、壁には薄型の大形テレビがかけてあることで共通していた。

ところが、ひとたびさらにその奥の診察用待合室に足を踏み入れると、同じように清潔感が保たれた室内に、アバーヤ（足首まで全身をすっぽりと覆い隠す黒い長衣）をまとい、ニカーブ（頭髮だけでなく、目から下も長く黒い布で覆う被り物）をしている女性が何人か座っているのが目に飛び込んできた。先述のH医師のクリニックでは、部屋の4カ所に女性たちがグループをつくっていたが（おそらく家族や付き添いの人と何人かで訪れ、1カ所に固まって診察を待っていたのだろう）、そのうち三つのグループにはニカーブ姿の女性がいた。

近年は、女性の被り物も多様化し、顔まで隠すニカーブ姿の女性もカイロ市内では、珍しくなくなっている。とはいえニカーブには、比較的生活水準が低く、カイロ市内というより近郊農村出身の女性がつけるものだというイメージが根強く存在する。そのため、高額な費用がかかる最先端の体外受精クリニックに、ニカーブ姿の女性が多く来院していたのには驚いた。そのニカーブの目的が、顔を隠すことで体外受精クリニックに来院する自分の姿を周囲の人々にみられまいとしたことにあるかもしれないと思いついたのは、日本に帰国してからのことである。

また、ファイザが語った「ムシャハラ」にも、不妊のスティグマを垣間みることができる。「ムシャハラ」の中核である、生殖能力を凍結する力は、ほかの女性にも伝染するものと考えられていた。伝染は本人の意思とはかわりなく生じるとされ、「ムシャハラ」をもつとされる女性には、ほかの女性の不妊が自分由来であることを否定する手段はない。自ら子どもを授かるまで、「ムシャハラ」をもつとされる子どもをもたない女性が社会的なリスクであることを抜け出す方法はない。

このように、既婚女性のたしなみ、あるいは夫への愛の表現として性交渉、妊娠への努力が語られることは、不妊を抜け出せない女性が、子どもをもてないという悲しみに加え、生殖能力の欠如という劣等感、さらには、夫に愛されず夫からの愛を受けとる価値のない女性としての屈辱に晒されることと対をなしている。生殖補助技術という新たな希望が入手可能な時代になったとはいえ、あるいはそれだけに、不妊とされる女性たちにはいまだ大きな苦痛が強いられているのである。

## Ⅵ 新たな病としての「子ども欲しい病」

夫婦にとって子どもをもつことが当然のこととして期待される一方、近年、もつべき子どもの数も大きな問題になりつつある。2016年の夏、ファイザはすでに、男児三人、女児二人の子どもをもち、第六子の妊娠後期に入っていた。このように、性交渉、妊娠、出産についての知識や経験でほかを圧倒するファイザは、生殖能力の高さにより、夫に愛される価値の高い女性として、同じ年頃の周囲の女性たちに高く評価されていた。ところが、彼女の子どもの多さは、その同じ女性たちから彼女の弱点として指摘されることもあった。

### 後進的現象としての子だくさん

ファイザの子どもの数は、先述したエジプトの若者が考える理想的な子どもの数、2.8 (PCWANA 2011) をすでに上回っている。近年の標準に照らしても子だくさんのファイザの状況は、婚家 (Mの家族) においてファイザに否定的見解が示される場合に言及された。たとえばそれは、夫の関心を自分と子どもたちにだけひきつけるためのひとつの計略として語られた。Mの両親とMの兄弟家族とひとつ屋根の下に暮らすファイザにとって、Mを独り占めしようとする行為はそのまま、Mをほかの家族から引き離そうとする行いとして解釈される。そうした行為を、婚家は、ファイ

ザによる自分たちへの反逆とみなすことがあった。さらに彼らは、自分の計略に子どもを利用していることや、そのやり方が古風であるとして、ファイザに「頭の太った女性」（後進的な考えをもった女性）という評価を押しつけることがあった。ファイザは、子どもの適正な数は3人と話していたが、人が授かる子どもの数は神の意思なのだと語っていた。こうした発言の矛盾や神への言及も、彼女を悪しざまに言う人々にとっては無責任で軽率な振る舞いとして、ファイザの「教育のなさ」を露呈するものとみなされていた。そんななか、ファイザの子だくさんの状況は、なにより子どもの教育をめぐる文脈において否定的な意味合いでMの家族内で言及されていた。

### 子育てをめぐる新たな価値観

現代エジプトの若者にとって、理想の子どもの数は2～3人とされていた。この数字の理由として現代カイロの若者がまず言及するのは、子育てにかかるコストである。ここでいう子育てのコストは、教育費とほぼ同義ととらえることができるだろう。

都市部では、子どもを私立学校に通わせることが理想とされるうえ、大学受験での成功をめざし、幼稚園に通うか通わないかのうちから塾に行かせたり、家庭教師をつけることも常態化しつつある（Hartmann 2008）。

学校、塾、家庭教師には幅広い料金体系があり、サービスの一つひとつが階層化されている。料金が高いことと質が高いことは混同され、高額なコストをかけることが、子どもの学業の成功、ひいては将来の社会的成功になると信じられている。こうした文脈のもと、子育ては子どもに輝かしい将来を約束することと同一視され、さらにはそのために家族がどれだけ金銭的資源を費やすことができるかというコストの問題として語られる。理想の子どもの数がコストの問題として語られるのは、こうした背景からである。

## 「育児」から「教育」へ、母役割の変化

家庭の収入から逆算するかたちで養育可能な子どもの数が語られる状況において、ファイザとMのように子だくさんの家庭には、子どもの教育を真剣に考えていない夫婦という汚名が着せられることがある。とりわけ、学歴競争がし烈化するカイロでは、子だくさんは「農民的」（カイロでは、非近代的、後進的という意味で農民という語彙が用いられる）とされ、非難の対象とされることがある。ファイザの場合は、そこに子どもたちの学業不振が加わり、母親として、女性としての彼女の評価を下げる弱点とみなされることもあった。

エジプトでは近年、学歴競争のさらなる加速が社会問題にまでなっている。激化する学歴競争の背景には、よい大学のよい学部への進学が子どもの輝かしい将来を約束するという社会的認識があり、子どもたちの多くは、日々性別を問わず、早い場合は3歳前後から勉強漬けの生活を強いられる。母親には、監督者として、その教育の主たる責任が課されている。

これが、ファイザにとっては大変な重荷となっていた。そもそもファイザは、自分自身がそこまで懸命に勉強した経験をもっていなかった。これは、過去20年間で下層中産階級の女性の平均的学歴が、大きく上昇した社会変化のなかではしかたがないことでもあった。職業訓練高校まで通ったファイザの学歴は、同年代の女性たちのなかでは決して見劣りするものではない。彼女の二人の弟もまた、大学には進学していなかった。当時はそれでも、ファイザの母親が非難されることは考えられなかった。

ところが、若者の高等教育就学率が5割に達し（うち大学は2割）、そのうちの45%を女子が占めるに至り（PCWANA 2011, 76）、ファイザにも新しい母親像が求められるようになってきた。現在、母親に新しく求められるようになった教育者としての役割は、しつけをするというよりは、より直接的に学業成績での成功をもたらす監督者としての責任を意味している。ファイザも懸命に、子どもたちに家庭教師を雇い、学習センターに通わせ、と手を尽くしてはいたが、子どもたちの成績が、MやMの兄弟家族の期待

を満たす水準に達することはなかった。そもそも、ファイザの婚家であるMの家族は、ファイザと同世代のMの姉妹二人を1980年代からカイロ大学に進学させるほど、教育熱心な家庭であったため、彼女の子もたちの成績不振は、母親の「教育のなさ」を反映したものとされ、ファイザとMの家族との溝をさらに深めるものになっていたようだった。

ファイザ自身の言動にも、自分に勉強ができる子どもを育てるための資質や経験に欠けていることを自ら恥じる様子がみてとれた。たとえば、長男が10歳になる頃には、ファイザが筆者に話す話題は、そのほとんどが子どもの勉強についての悩みになっていた。その姿は、性交渉、妊娠、出産について生き活きと語っていた彼女とは別人のようだった。

さらに子どもたちが成長するにつれ、彼女の子もたちまでもが、母親である彼女を馬鹿にした態度をとるようになっていた。子どもが小さなうちは、ファイザもこちらがたじろぐような権幕で子どもたちを諷めていたが、最近では、子どもたちが彼女を馬鹿にした失礼な言動をとっても、それに言い返すことすらなくなっていた。彼女はそれを、特別な理由からの行動ではなく、単なる諦観の結果だと筆者に説明した。ファイザはそうした年嵩の子もたちの仕打ちに明らかに傷ついていたが、子どもにも筆者にもそのことを上手く伝える表現を探しあぐねているようにもみえた。そして筆者が、すっかり変わってしまった彼女の子もたちへの態度を話題にすると、「私にはヤーセルがいるからいいの」、と言って2歳になる末息子を膝の上に抱き上げ、彼を抱きしめながら、「心配しないで」と言って会話を絶ち切った。

ファイザが日々生きる環境では、子どもの教育においても、経済的負担は父親であるMが、それ以外の日々の生活の監督は母親であるファイザが、と男女で役割分担がされていた。ただし性交渉、妊娠、出産とはちがって、「女性の仕事」である子どもの教育については、実家の母親や親族女性の手助けを期待することはできず、自分自身での対処を求められていた。子どもの教育をめぐる期待やそのための環境は日々大きく変化し、前の世代の育児経験や見解を参考にするには状況が変わりすぎていた。そんななかファイザは、母親世代が経験してこなかった、子どもの教育の監督者とい

う新しい母役割を生きようともがきつつ、上手くいかない現実には自信を失い続けているようにみえた。

家族計画にあれだけ知識にも資源にも富んでいたファイザが、単なるうっかりや偶発的な事故として、つぎつぎに子どもを産んでいたとは思えない。夫との合意に背くことを知りながら、ひとり、またひとりと子どもを産んでいた彼女の思いを考えると、彼女がおかれていた状況とそこで幼い赤ん坊が果たしていた役割に思いをはせずにはいられない。努力をしても望ましい子育ての結果が得られない状況において、それでも重責をひとりで抱えなければならないとき、自分自身をとり戻そうと、自分の価値を保証してくれる別の方法を試みる彼女のやり方を、無分別と片づけることは難しい。ましてや、Mのように彼女を「病気」という異常な状態として切り捨てることには大きな違和感が残る。むしろつぎつぎと子どもを産むというファイザの行動は、子どもをもつべきという規範と、子どもを適切に教育すべきという二つの価値規範を同時に生き、その狭間で自分自身をつくり上げることを強られる彼女が、片方の欠損を、自分が得意とするもう片方で埋めながら、全体として自分なりにバランスをとろうとした、そうした処世術の結果であるようにみえた。

## 二つの期待の狭間で

子どもをもつことにたいする社会的期待と、子どもの適正な数をめぐる見解は、どちらも現代カイロの社会的期待の問題である。しかしその二つの期待を同時に満たすことは難しい。その理由の一端には、それぞれが異なる論理にもとづく期待であることを指摘できるだろう。子どもをもつことへの期待が、父系系譜の継承であったり、宗教的責任として考えられてきたのにたいし、あるべき子どもの数の議論は、子育てにかかわる家計の負担や、国家としての次世代教育予算の規模といった文脈で行われてきた。ファイザの事例は、それらの別々の期待が特定の政治経済的状況のもとにたまたま並置されている可変的なものであること、またその二つは場合によっては衝突すること、さらにどちらの社会的期待が満たされない場合に

も、それが女性の問題として認識されていることを明らかにする。子どもをもつこと、しかしもちすぎないことの両方が期待される社会において、生殖をコントロールするうえで生殖補助技術に寄せられる期待は、今後ますます高まっていくと考えられるだろう。

## おわりに

Mが、つぎつぎに子どもを妊娠出産するファイザを「病気」と表現したとき、筆者の脳裏をよぎったのは、エジプトの夫婦にみる性別で分断された世界というイメージだった。W医師にそのことを伝え、彼は少し間をおきこういった。

「僕は、自分がやっていることが少しでも人の助けになると思っているけれど、そのジレンマはつねに抱えているよ。子どもが欲しくてやってくるエジプト人のカップルは、子どもを得ることで、本当に幸せになれるのかって」。

労働市場への参加状況にかかわらず、エジプトに生きる女性にとって、若くして結婚し子どもをもつ、という社会的期待に従わずに生きることは依然として難しい。そのため、生殖補助技術は、これまで子どもをもつことができないことを理由に、過度に低い社会的評価が与えられてきた女性たちには大きな希望となっている。夫からの愛情という不明瞭な基準が大きな意味をもつ現代カイロの女性たちにとって、子どもをもつという、明確な基準を手に入れるチャンスの広がり、彼女たちの幸せを考えるうえで意義深い。しかしそれはまた、結婚や生殖という基準で女性を評価する社会的価値観を補強するものでもある。そしてそこには、妻と夫との越えがたい分断が通底する。W医師の言葉には、このジレンマを、生殖補助技術の提供者である医師もまた問題意識として共有していることを読みとることができるだろう。

現代カイロにおける、女性による、女性のためのさまざまな生殖技術、とりわけ体外受精など医師が実施する生殖補助技術の利用は、今後ますます

す「夫に愛されるために」女性がなすべきことのひとつとして重要な位置を占めるようになると考えられる。本章でとり上げた生殖年齢にある女性たちにとって、生殖補助医療（生殖補助技術の利用）はすでに、必要とあれば努力によって手に入れるべきサービスであるかのようにとらえられ始めている。この現象は、理想の家族をコストで語る風潮の一部とみなす冒頭のMの発言とも大きな重なりをみせている。現代カイロでは、すでに学校教育は、コストにもとづく経済的選択の問題として語られている。この先、適正な数の子どもをもつことも同様に、あたかも消費の一形態として認識されるようになってもおかしくはないだろう。

しかしながら、生殖補助医療へのアクセスが簡便化される一方で、当の女性たちの声を離れて、性交渉、妊娠、出産がコストで語られる傾向が強まるとき、女性たちに強いられる痛みが理解不可能なものとして社会の主流言説から排除されるのではないかという懸念はぬぐえない。ファイザの悩みや、彼女なりの問題への向き合い方は、Mをはじめとする男性や社会全般に、コストの論理に沿わない非理性的なものとして切り捨てられる可能性が高い。そうした特定の論理からだけの現実理解に抗ううえでも、生殖補助医療がさらなる広がりを見せているからこそ、子どもをもつことやもてないことにかかわる痛み、さらには子どもをもったことにより生じる痛みには、今後、よりいっそう関心を向け続ける必要があるだろう。

#### 〔注〕

- (1) 本章では柘植（2012, 231）の議論を念頭に、子どもをもつために生殖を補助するさまざまな技術を「生殖技術」、体外受精や顕微授精などを「生殖補助技術」とする。
- (2) ファイザは5回の流産を経験したと話していたが、周囲の人間には、そのうちの何回かは人工妊娠中絶であったと考えられていた。
- (3) その世代にカイロ郊外の労働者の家庭で育った人物としては珍しくなく、どちらの父親も文盲だったが、成人後はMの父はホテルのシェフ、ファイザの父はトラック運転手として、それなりによい収入を手にかけていた。
- (4) エジプト都市部では、スポーツクラブがレジャー施設の役割を果たしている。公共の公園など、子どもたちが気軽に体を動かして遊べる施設がないため、金銭的に余裕のある家庭では、入会金と年会費を払って会員になったスポーツクラブに子どもを通わせている。追加の月謝を払って特定のスポーツチームに参加させることも

あれば、ただ子どもを安全な敷地で遊ばせることを目的にスポーツクラブに通わせることもある。

- (5) ただしこの年齢は、過去の調査の数値と比べれば上昇傾向にある（PCWANA 2011, 118）。
- (6) 本章ではアラビア語カイロ表現を、発話される音に沿って表記している。そのため、一般的なアラビア語の表記とは異なることがある。
- (7) エジプトでは、既婚女性は頭髮、眉毛、まつ毛以外の体毛をすべて脱毛する習慣がある。
- (8) エジプトで休日となる金曜日の前夜として、木曜日の夜を、夫婦が性交渉をもつ時間とする考え方があり。木曜日の夜は「ベッドの夜」と呼ばれ、テレビなどでも恋愛映画やロマンチックなコンテンツが好まれる。
- (9) 性にまつわるエジプトの男性の認識については、第2章を参照のこと。
- (10) こうした際に用いられる「ムシャハラ」にかかわる装飾品の形状は事例ごとに異なっていた。なかには、ネックレスではなく、糸を何重にも手首にまくことで「ムシャハラ」の被害者になることを避けることができる、という情報もあった。

### 〔参考文献〕

#### <日本語文献>

柘植あづみ 2012. 『生殖技術——不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか——』みすず書房.

#### <英語文献>

- Ali, Kamran Asdar 2002. *Planning the Family in Egypt: New Bodies, New Selves*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Atiya, Nayra 1982. *Khul-Khaal, Five Egyptian Women Tell Their Stories*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Hartmann, Sarah 2008. *The Informal Market of Education in Egypt. Private Tutoring and Its Implications*. Mainz: Institut für Ethnologie und Afrikanstudien, Johannes Gutenberg-Universität.
- Inhorn, Marcia C. 2003. *Local Babies, Global Science: Gender, Religion, and in Vitro Fertilization in Egypt*. New York and London: Routledge.
- Joseph, Suad 1994. "Brother/Sister Relationships: Connectivity, Love and Power in the Reproduction of Patriarchy in Lebanon," *American Ethnologist* 21 (1) 1: 50-73.
- Kandiyoti, Deniz 1988. "Bargaining with Patriarchy," *Gender and Society* 2 (3): 274-290.
- Mernissi, Fatima 1985. *Beyond the Veil: Male-Female Dynamics in Modern Muslim Society*. London: Al Saqi Books.
- PCWANA (Population Council West Asia and North Africa Office) 2011. Survey of Young People in Egypt.

World Bank 2017. “Fertility rate, total Arab Republic of Egypt,” (<http://data.worldbank.org> 内に掲載。2017年2月10日最終アクセス).